

## 民俗建築アーカイブ

### 1933年の鹿苑寺金閣の写真

日本民俗建築アーカイブ担当

Photograph of Rokuonji Kinkaku or  
Golden Pavilion in 1933

Editorial Committee

本学会の前会長佐藤重夫氏は大学4年の頃、即ち昭和8年の頃、京都奈良をはじめ各地の社寺仏閣を回って多くの写真を残した。前回（民俗建築146号）はその中から東村山市の正福寺地蔵堂を取り上げ、昭和8年の頃と現在の地蔵堂を比較して述べた。今回も引き続いて社寺建築の新旧比較を取り上げてみる。

佐藤氏の写真の中に昭和8年4月撮影の金閣の写真が2枚あった。1枚は南西の方向から鏡湖池に浮かぶ遠景の金閣（写真1）であり、他の1枚は北西の角から金閣を見上げる写真（写真2）である。モノクロ写真であるから燦然と輝く楼閣の華麗さは見られないが、それでも長い歴史の重みが渋い風格を漂わせている。

現在の金閣は誰もが知るように昭和25年に放火によって焼失し、昭和30年に再建されたものであるから、佐藤氏の写真は焼失前の金閣である。この写真には現在の見慣れた金閣とは違う部分があって興味がわく。建物の復元はどの時点を基

準にして復元するかによって違いが出てくるが、昭和25年の焼失前まであった金閣はどのようなものであったか考えてみたい。

金閣は長い歴史の中で度々の戦に巻き込まれ、本来とは違った目的に使われたり、建物の変更もなされたりしてきた。

金閣が文化財として扱われるのは明治になってからである。明治新政府の恥ずべき狭隘な施策から発した廃仏毀釈の動きも明治4年にはさすがに誤りに気付いて、政府は廃仏毀釈によって破壊された文化遺産の調査を始めた。これが「古器旧物保存法」（明治4年）の布告につながる。そして明治30年には「古社寺保存法」となって、日本の文化財保護に関する法律が誕生した。やがて昭和4年（1929）には「旧国宝保存法」に変わったが、今日、貴重な文化財を何のためらいもなく破壊していく一部世界の蛮行を見ると、明治政府がすぐに廃仏毀釈の誤りに気付いて善処策を打ち出したことは日本国民として救われる思いがする。

さて、金閣は「古社寺保存法」施行の6ヵ月後に「特別保護建造物」に指定された。当時は“足利”と云えば極悪人が蛇蝎のように扱われていたときである。金閣が三代將軍足利義満の創建とはいえ、叛逆人足利尊氏の孫であるから、その建物を特別保護建造物に指定するには侃侃諤々かんかんがくがくの議論があったであろう。それをのり越えての指定であるから、文化財に対しての見識は守られたのである。ところでその頃の金閣の姿は満身創痍の

痛々しいものだったといえよう。当時の金閣の写真はきわめて少ないが、最も有名なのは写真家小川和正（1860～1929）の明治26年に撮った写真（写真7、Wikipedia.org「鹿苑寺」より転用）である。これは各層に庇を支える補強材が何本も入れられ、三層の西側は格子の手摺にして四角い窓を付けた板壁を張り、縁を内側に取り込んでいる。三層にある火灯窓は板壁の中であって外からは見えない。更に三層の四隅には独立壁を付けて建物の横揺れを補強している。各層に補強の柱を何本も入れなければ深い出の軒がもたないくらい傷んでいたのである。佐藤氏の写真はこれとは異なり、両者を比較しても違いは判然としている。実は金閣が特別保護建造物に指定されて7年後の明治37年（1904）から39年にかけて解体修理をしているのである。佐藤氏の写真すなわち昭和25年までの金閣は、明治39年に修理した金閣なのである。

しかし、その金閣も現在の金閣とは異なるところが幾つかある。一見してわかる違いは二層目の西側で、三間の板壁のうち中央間の一間が腰壁上に連子窓が付いているのに対して現在の金閣は全面板壁であり、窓は無い。また、昭和8年の写真はモノクロ写真といえども三層目の壁や軒裏、高欄が金箔押しであることは色合いからも分かり、これに対して二層目は壁も高欄も金箔を押された感じはなく、素朴造りである。一方、現在の金閣は二層三層ともまばゆいばかりに光り輝いているのを見る。

また、初層の西側に張り出した切妻、吹き放しの小亭「漱清」の棟は、青海波模様の組棟であったのが、現在は熨斗瓦を重ねて棟端は鳥袂の付いた鬼瓦になっている。更に初層の北側は縁の中央から下に降りるための段が一段ついていたが、現在は無い。

このような復元に至った過程や調査研究についてはすでに多くの報告書や論文で明らかなることであろうから、本稿ではこれらについては言及しない。

ただ、金閣には多くの謎と伝説がある。それは未だ歴史的に解明されていないことが多いということである。その一つに金閣が創建されたとき、その北側に天鏡閣という二階建ての建物があったという。それと金閣は二階同士を繋ぐ空中廊下が渡されていた。この天鏡閣は客をもてなす宴会場であって、先ずは金閣でもてなしてから廊下を通して天鏡閣に招いたという見方をしている。したがって金閣の二層には外部の廊下に繋がる出入り口が備わっていなければならない。二層の室内は「潮音洞」と称する仏間である。今は観光客は内部に入れないが鏡湖池に沿った金閣回遊の道にパネル入の写真が展示されていたので、内部の様子が分かった。それを写したのが写真8である。かつて安置されていた観音像は応仁の乱で失われ、今は新しい観音菩薩坐像（岩谷観音）に変わっているというが、四方を四天王が守り、仏たちは黒漆塗の壁と床面に映って幻想的な空間を創りだしている。天井だけがやや明るい、飛天像と

鳳凰が舞う浄土の世界を現しているのであろう。

東、西、北面は漆黒の板壁で、ただ、須弥壇の後方に当たる中央間のみが金箔の扉であり、それが観音菩薩へ光背のように柔らかく暗い金色の光を投げかけている。それ以外の光と云えば、正面の格子窓から差し込むだけであるが、これとても軒先から二間も深く入った脇間の腰壁の上に細い格子窓があるだけである。そこから差し込む光は心細いほどにやさしく、そんな薄明かりの中に浮かび上がる仏たちの姿は最高の美術に値するものであろう。これが今の潮音洞である。振り返って再び復元前の潮音洞を想像すると、西壁に空いていた窓から差し込む光が仏たちを左方から明るく照らす。これを想像して、潮音洞の様子と比較すると、今の漆黒の空間の方が優れているように思える。やはり本来の造りは幽玄なものであっただろう。それが何時の頃か西壁の真ん中に格子窓を付けて、神秘的な雰囲気を変えてしまったようだ。昭和8年の写真のおかげではからずも金閣の潮音洞の本質に目を向けることができた。

謝辞 本稿の執筆に際しては河村明植氏より天鏡閣の資料と共にご教示を戴いた。ここに記し厚くお礼申し上げます。